

詩編 16 : 1～11

ルカによる福音書 24 : 1～12

「復活なされた」

【前奏】

【招詞】 詩編 95 : 1～2

【祈祷】

【聖書】 詩編 16 : 1～11、ルカによる福音書 24 : 1～12

【説教】「復活なされた」

<復活がなければ>

イエスさまは、十字架につけられ、死んで、お墓の中に葬られました。

この、確かに死んで葬られた方が、復活なされた。生きておられる。それが、今日の御言葉が告げていることです。

イエスさまの復活がなければ、イエスさまを信じる群れもなく、教会もなく、わたしたちもここに集まることはなかったでしょう。イエスさまの十字架の死と復活の出来事は、キリスト教の信仰の中心となる事柄です。

しかし、今日の聖書から分かることは、イエスさまの弟子たちをはじめ、人々がすぐにイエスさまの復活を信じるのが出来たのではない、ということです。

復活の日の朝、そこはすぐに喜びが満ちあふれたのではなく、混乱と、疑いと、驚きに包まれていたことが語られています。

死んだ者が復活する。これは、わたしたち人間の思いも、経験も、力も、理解も、はるかに超えている出来事です。信じられず、疑い、驚くのは、当然の反応です。

今だって人々が復活のことを簡単に信じるのが出来ないように、当時の人だって、イエスさまの復活を疑ったし、戸惑ったし、信じられなかったのです。

イエスさまにずっと従い、御言葉を聞き続けてきた弟子たちでさえそうでした。

イエスさまの十字架の後、彼らは恐れと不安と絶望の中にいました。ユダは裏切って離れてしまい、残りの十一人もまた、イエスさまが十字架に架けられる時には、誰も最後まで従っていくことは出来ませんでした。イエスさまを裏切った負い目。逃げ出してしまった自分の弱さ。そして、十字架に架けられた人の弟子であるということから、自分にも危害が及ぶかも知れないという恐れや不安。

…十字架直後の弟子たちには、イエスさまが神の御子であり、救い主であると告げ知らせることなど、到底不可能なことでした。希望も、勇気も、力もない。そんな弟子たちでした。

しかし、そんな彼らが、やがて迫害も恐れず、死をも恐れず、イエスさまこそ神の御子であり救い主であると、世界中に喜んで福音を宣べ伝えるようになったのです。それは、彼らが、復活し、生きておられる、イエスさまご自身と出会ったからです。

イエスさまを信じる信仰は、イエスさまが救い主であるという確信は、弟子たちやわたしたちが、自分で何かを乗り越えたり、自分の力で突き詰めて、到達して、つかみ取るものではありません。信仰は、十字架で死んで救いの御業を成し遂げ、復活なされた生ける神の御子、イエスさまご自身が出会って下さることによって、与えられるものなのです。

今日のところでは、まだ誰も復活のイエスさまと出会っていません。しかし、神さまの導きによって、復活のイエスさまと出会うための備えが、なされていることが分かります。

復活の日の朝、何が起こったのか。本日はその出来事に耳を傾けていきましょう。

<婦人たち>

まず、イエスさまの復活を知らされたのは、弟子たちではなく、ガリラヤにいる時からイエスさまに従って来た婦人たちでした。

婦人たちはイエスさまの教えや、病の癒し、奇跡の御業を見て来ました。そして、エルサレムに入ってからのも、出来事も、裁判も、十字架の死も、その遺体がお墓に葬られるところも、一部始終を目撃していました。

この一連の出来事を目撃者、そして復活の知らせを最初に受け取ったのが、婦人たちである、というのは、とてもリアリティーがあります。

もし、イエスさまの復活が作り話であったとしたら、当時の女性の社会的地位はとても低いものでしたから、あえて女性を証言者にするには考えにくいのです。物語に信ぴょう性を持たせようとするならば、男性が目撃して、証言したことにする方が、よっぽど当時の人々の信頼を得ることが出来ます。

しかし聖書は、実際の出来事を見聞きした婦人たちの証言を書き記し、起こったことをありのままに伝えました。

また、イエスさまの復活の喜びの知らせが、最初にそのような女性たちに告げられたことは、イエスさまの誕生の知らせが、はじめに、ユダヤ人の立派な者たちではなく、野宿をする貧しい羊飼いたちに知らされたことを思い起こさせます。神さまは、実に弱く、小さくされている人々をこそ選び、真っ先に慰めと喜びの知らせを届けて下さるのです。

さて、十字架に架けられ、金曜日の午後三時ごろに死なれたイエスさまは、ユダヤ人の議員であるヨセフによって、日没までに、急いでお墓の中に葬られました。

ユダヤ人の暦では、日没になると新しい次の日が始まります。ということは、金曜日の日没から土曜日となるのです。土曜日は、ユダヤ人の安息日でした。

安息日は仕事をしてはならず、葬りの業も十分できなくなってしまう。さらには、ユダヤ人の律法では、木にかけられた死体は神に呪われたものであるから、その日のうちに埋めなければならない、と定められていました。

ですから、ヨセフは午後三時から日没までの数時間で、急いでイエスさまの葬りを終えなければならなかったのです。

ガリラヤにいる時から、ずっとイエスさまに従ってきた婦人たちは、イエスさまが十字架で死なれるところも、そのようにヨセフによって急いでお墓に葬られるところも、ずっと見守っていました。でも、彼女たちに出来ることは、何もありませんでした。

ですから、慌てて葬られたイエスさまの遺体に、せめて丁寧に香料を塗って差し上げたいと思い、彼女たちは、安息日は掟に従ってきちんと休み、その翌日、今で言う日曜日に、明け方早く準備した香料を持って、イエスさまを葬ったお墓へと向かったのです。

亡くなってしまったけれど、彼女たちは慕っていたイエスさまにお会いする気持ちで、お側に仕える気持ちで、お墓に向かったに違いありません。

当時のお墓は、岩に穴を掘って、その中に遺体を置き、入り口を大きな石で塞ぐような形でした。ところが、婦人たちがお墓に着くと、その入り口の石がわきに転がしてあり、中にはあるはずのイエスさまの遺体が見当たらなかった、というのです。

お墓が空っぽだった。これは確かに、復活のひとつの「しるし」でありました。

しかし、お墓が空っぽだったからと言って、それがすぐに復活を信じる信仰になったものではありません。

まず、彼女らは「途方に暮れていた」とあります。お会いしたかったイエスさまのご遺体がない。それで、途方に暮れてしまった。どうしていいか分からず、茫然としてしまった。何が起きているか、分からなかったのです。

するとそこに、輝く衣を着た二人の人がそばに現れました。これは、神の使い、天使です。婦人たちが恐れて地に顔を伏せると、二人は言いました。

「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。」

天使たちは、彼女らが墓の中にイエスさまに会いに来るのは、見間違いだ、というのです。お墓とは、死者を葬る場所です。死者なら確かにそこにいるでしょう。しかし、あの方は生きておられる方だ。だからここにはおられない。復活なさったのだ。なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。天使はそう、告げたのです。

そして天使たちは言いました。「まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出しなさい。人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか。」

…天使たちは「思い出しなさい」と言いました。

かつてガリラヤで、イエスさまがお話になったことを、弟子たちと一緒に旅に同行していた婦人たちも聞いていたはずだ、と言うのです。お話になったこととは「人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている」ということです。

実にガリラヤで、イエスさまはまさに弟子たちにこのことを語っておられました。それは9:22に、こうありました。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」

この後も、イエスさまは、ご自分が苦しみを受け、殺され、三日目に復活することを、繰り返し話してこられました。十字架の死と復活は、イエスさまが人々を罪から救い出すために、救い主として歩まなければならない道だったのです。

しかし、弟子たちも、そしてこの婦人たちも、確かに耳ではこの言葉を聞いていましたが、誰も理解していませんでした。仰っていることが分からなかったのです。怖くて聞けなかった、と語っているところもありました。

神さまに遣わされた救い主であるイエスさまが、罪人の手に渡され、十字架につけられ、殺される。なぜそんな恐ろしいことを仰るんだらうか。そんなことはあり得ない。あってはならない。…まず、イエスさまの十字架の苦しみと死の予告からして、彼らは、彼女らは、受け入れられなかったのです。

この時、イエスさまは、受難と十字架の死のことだけでなく、確かに復活のことも語っておられました。しかし、イエスさまが殺されることを受け入れていないのですから、その後のことなど、耳に入ってくるはずもありません。

婦人たちもまた、聞いた御言葉をそのままにしていた。信じたくないこととして、まるごと蓋をして、触れないようにしていたのでしょう。

しかし「思い出しなさい」と言われた今や、彼女らは、確かにイエスさまが語っておられた御言葉、「人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている」と言われていたことを、思い出したのです。

<御言葉を思い出す>

「イエスさまの御言葉を思い出す」。これが、復活のイエスさまを信じる大きな一歩でした。御言葉は語られていました。すべては告げられていました。

でも彼女たちは、自分たちの思いが先立って、イエスさまの御言葉を理解せず、耳を塞いでいたのです。

ところが今、それが本当のことだと思い当たった。イエスさまが語っておられたこと、イエスさまが成し遂げられたこと、そして、今ここにいる自分たちに起こっていること。それらが結びつき、御言葉が現実のこととして迫ってきたのです。御言葉が実現したことが分かってきたのです。

イエスさまが十字架につけられ、殺され、復活なされる。これは、聞いたことのないこと、前代未聞のことではありませんでした。語られていたのです。神さまのご計画の通りであったのです。墓が空っぽであったのは、成し遂げられると宣言なさったことが、まさに成し遂げられたということだったのです。

彼女らは、墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせた、とあります。

ドキドキしていたと思います。実はまだ、完全に起こったことを理解して、信じられたわけではなかったと思います。でも、知らせなければと思った。彼女らは、起こったことの一部始終を、そしてかつてイエスさまから聞いた御言葉を思い出したことを、十一人の使徒たちと、他の者たちに語ったのです。

<使徒たちとペトロ>

ところが、これを聞いた使徒たちは、なんと「この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった」とあります。

彼らもまた、婦人たちからこのことを聞いて、イエスさまの御言葉を思い出したでしょう。しかし、現実のこととは思われなかった。まだ受け入れられなかった。彼らはまだ目の前の、暗い、圧倒的な死の現実、捕らわれていたからです。

後に、イエスさまの十字架と復活を命がけで告げ知らせようになる「使徒たち」も、復活の日の朝は、実にこのような不信のかたまりだったのです。

しかし、ただ一人、ペトロは立ち上がって、墓へ走っていった、とあります。

立ち上がって、墓へ走った。居ても立っても居られなかった。婦人たちの言ったことを、自分の目で確かめたかったのでしょうか。イエスさまの御言葉を、彼もはっきりと思い出したのでしょうか。

ペトロは、十一人の使徒たちの中でも、特に最も深く、イエスさまに対する罪の負い目を感じていたのではないかと思います。

彼は、以前は、自分こそイエスさまの一番弟子であるとの自負があったと思います。それに、かつてのペトロは、死んでもイエスさまに従い抜くという覚悟を持っていました。

ところが、最後の晩餐の後、他の弟子たちもいる中で、イエスさまとペトロの間でこのようなやり取りがあったのです。

22：31～34、イエスさまが仰いました。「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけて神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」するとシモンは、「主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」と言った。イエスは言われた。「ペトロ、言うておくが、あなたは今日、鶏が鳴くまでに、三度わたしを知らないと言うだろう。」

そしてイエスさまの予告通り、ペトロは三度イエスさまとの関係を否定しました。そして、その瞬間に鶏が鳴き、捕らえられたイエスさまが、自分を見つめておられるのを見たのです。

ペトロは激しく泣いた、とありました。イエスさまが十字架で死なれた後は、さらに激しい後悔や、自責の念や、自分の弱さに打ちのめされていたのではないのでしょうか。

しかし今、婦人たちが語ってくれたことを、ペトロは聞きました。思い出さない、と言われた、イエスさまが語って下さった御言葉。十字架につけられ、殺され、三日目に復活すること。そして、あなたの信仰が無くならないように祈った、と言って下さったこと。

イエスさまの御言葉が、ペトロを立ち上がらせたのです。

ところで、12節の「しかし、ペトロは立ち上がって」とある、この「立ち上がって」という言葉は、7節の「三日目に復活することになっている」のところで、「復活」と訳されている言葉と同じ言葉です。これは「起きる」「起き上がる」という言葉です。

イエスさまが死者の中から起き上がられた。復活された。

そのことが、ペトロを起き上がらせた。立ち上がらせた。

イエスさまの救いの出来事は、神さまの力は、ペトロを立ち上がらせ、彼をイエスさまの許へと走らせます。ペトロは、罪の中から、絶望の中から、イエスさまによって立たせられようとしています。

しかし、やはりここでも、ペトロがイエスさまを求めて向かった先は、死者の居場所であるお墓でした。ペトロも、復活し生きておられるイエスさまを、まだ死者の中に捜し求めているのです。目の前で起こった圧倒的な死の現実が、まだペトロを捕らえています。

立ち上がったペトロは墓へ走って行き、身をかがめて中をのぞきました。そこには、イエスさまの遺体を包んでいた亜麻布しかありませんでした。

ペトロにしても、婦人たちにしても、その目で見て確認できたことは、墓が空っぽであったこと。死なれたイエスさまのお体がない、ということです。今の目の前の現実、イエスさまがおられない、ということだけです。

ペトロもまだ、ここで復活の喜びを味わうことはなく、まだ信じ切れず、この出来事に驚きながら家に帰って行きました。

天使たちが言った通り、「生きておられる方」を死者の中に捜しても、復活したイエスさまに会おうと、お墓にいても、生きておられる方は、もうそこにはおられません。

ペトロもまた、見当違いなことをしていたのです。

しかし、イエスさまの御言葉を思い巡らしつつ、ペトロはイエスさまを求めた。復活のイエスさまにお会いしたいと求め始めたのです。

そしてこの後、復活し、生きておられるイエスさまご自身が、彼らと出会って下さいます。

死者の中から復活なされたイエスさまが。人を暗く包み込む罪と死の現実には打ち勝たれたイエスさまが。人々の閉じられた目を、塞がれた耳を、頑なな心を、開いて下さり、恵みの現実を確かなものとして示して下さいます。

そこにおいてこそ、御言葉を受け入れ、復活を信じる信仰が、イエスさまを救い主と信じる信仰が、イエスさまと出会った一人一人に、与えられていくのです。

<今も生きておられる>

わたしたちも同じです。はじめに聖書の御言葉を聞いて、すぐに信じるようになった訳ではなかったのではないのでしょうか。

よいことを語っているな、というところはあったかも知れません。でも初めは、復活を信じられなかったのではないのでしょうか。そもそも、イエスさまの十字架の死が、わたしの罪のためであるということが、理解できなかったのではないのでしょうか。御言葉が分からず、イエスさまがどこにおられるか分からず、途方に暮れたこともあったのではないのでしょうか。

しかし、生きておられる復活のイエスさまが、一人一人と出会って下さり、御言葉を通して、聖霊のお働きを通して、一人一人を、不信や、疑いや、恐れの中から立ち上がらせて下さいます。そして、神さまの御力が、わたしたちをイエスさまの許へと導いて下さり、生きておられるイエスさまとの出会いを与えて下さり、わたしたちを、救いの恵みを信じる者として下さるのです。

信じることも、わたしたちは自分の力では出来ません。復活し、生きておられるイエスさまだけが、神さまの御力だけが、わたしたちの罪と死の現実を打ち破り、救いの恵みの現実にとらせて下さることが出来るのです。

2000年前に、死者の中から復活したイエスさまは、今も生きておられます。そのお姿は、復活の後、天に上げられて、地上で、この目で見ること出来なくなりました。

しかし、わたしたちはこの礼拝において、聖書の御言葉を通して、聖霊のお働きを通して、またイエスさまを信じる群れの中であって、確かに今も、生きておられるイエスさまと出会っているのです。

そして、あの御言葉は、イエスさまにおいて確かに実現し、このわたしの救いの出来事として起こったのだと、確かに信じる者へと変えられていくのです。

初代教会の時代から、イエスさまを信じる者たちの群れは、イエスさまの復活の日が週の初めの日であったことから、日曜日を礼拝の日とし、共に集って御言葉を聞き、神さまの愛と救いの御心を思い起こし、イエスさまの救いの御業を思い起こし、そして今この時に、生きて共にいてくださるイエスさまとの交わりを喜ぶ日としてきました。

今のわたしたちもまた、この生きておられるイエスさまが出会って下さった群れの一員として、十一人の使徒たちや、婦人たちや、他の弟子たちの群れに連なって、週の初めの日に、共にこの主の日の礼拝をささげているのです。

そしてさらにこの群れに招かれて、御言葉を聞き、生きておられるイエスさまと出会い、救いを信じる信仰を与えられた者が、一人、また一人と加えられていきます。

復活のイエスさまは、いつもこの礼拝の中心にいて、生きて働いて下さるのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちの罪のために死んで下さったイエスさまが、罪と死に打ち勝って、復活し、今も生きておられ、わたしたちと共にいて下さることを感謝いたします。

どうか、世の一人でも多くの者が、救いの御言葉を聞き、生きておられるイエスさまと出会うことが出来ますように。そして、告げられている、十字架の罪の赦しや、復活の命が、このわたしの罪の赦し、このわたしの復活の命、このわたしの救いの出来事であることを、信じる事が出来ますように。

このお祈りを、復活の主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讃美歌】 327 「すべての民よ、よろこべ」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讃美歌】 26 「グローリア、グローリア、グローリア」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン